

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ベートーヴェンの《第九》と共に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋山, 隆典, Akiyama, Takanori メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1433

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



エッセイ

ベートーヴェンの《第九》と共に

秋山 隆典

ベートーヴェンの第九は自身のレパートリーの中でも、聴くより先に演奏する側から入っていった、数少ない作品のひとつです。

現在、最後に演奏してから、かれこれ10年ぐらい第九とは離れています。

そして、これから死ぬまで歌う事は無いと思う、と言うか、もう歌いません。

それは、先日の授業内で映画「フォローイング、ザ、ナインス」を見て、第九を演奏していた頃のある事を思い出し、更に認識したからです。

演奏していた時期は思わなかったのですが、久しぶりに聞くとやはりいい作品でした。しかし、最初のあのバリトンの出だしのソロは、オペラー本を歌う以上の体力と緊張感と精神力を使っていた事を思い出しました。

3楽章から身動きも出来ず、一声も発せず座り待ち続け、突然立ち上がり大声で歌う。立ちくらみに襲われ、観客のいっせいに自分に注がれる視線、ウトウトと寝ていた観客も、ハッと目を覚ましこちらを見る。

おまけに、無慈悲な無伴奏、オケにも助けて貰えない、放り出されてしまった様な孤独感。更に、声楽的には旋律と言葉の関係を何も考えないで作曲したかのようなレチタティーボ。コントラバスとチェロのブレスのいらぬ楽器と、同じレベルで行くわけがない。あの有名な旋律さえブレスを考慮していない。他のソロパートも合唱も、とても声楽的とは言えない。

16世紀ごろ始まった、人間が無理なく自然に歌えるよう「息に始まり息に終わる」と言うベルカントのコンセプトを、彼は知らないのか、無視したのか？

音の進行は息の続かないフレーズばかりで、ソロも合唱も必ず年末の時期には喉を壊すしまつ。

このような過去のジレンマが映画を見て蘇ってきました。映画でソロを歌っていた歌手も、声が荒れていてかわいそうでした。

第九のソロ部分の実質の歌唱時間は、(10分～15分程ですが、)オペラは長いものでも2時間、短くても1時間は歌うのに、より以上の疲労感があります。

しかしその反面、第九は1回のリハーサルで本番を行い、オペラは3ヶ月稽古してオケ合わせ、GPをして本番をします。場合によってはHPもあります。

ギャラは、ほぼ同じぐらいで第九はお得感があり、コストパフォーマンスは高いのです

が、1回の公演で1年ぐらいは寿命が縮む思いがします。なので、もう歌いません。

とは言うものの、実は声楽家になったのは、第九が大きなきっかけとなりました。始まりは、中学3年の合唱の部活からで、今は資料がありませんが、良くあるところの、中学生がどこかの団体に混じって歌ったのではなく、すべて中学生だけで行った中学生のみによる原語での第九、日本初演でした。

4楽章だけですが、伴奏はピアノ2台、ソロも中学生、僕ではないです。(残念ですが、、、) 当時は中学生だけで第九を演奏したと話題になり、録音が国立音大の研究題材にもなりました。

僕の中学校の合唱大好きな音楽の教師が、前任の中学の合唱部と僕の中学の合唱部との合同で試み、両校とも公立なので特に話題になりました。

その後、中学高校時代にも一般の合唱団でオーケストラと歌う機会が増えて、どんどん第九にはまって行き、ついにはいつかソロを歌えるようになりたいと、音大を目指したといういきさつです。

そして、大学時代にも年に最低10本は合唱を歌い、中学から数えると15年間で合計150本は合唱を歌ってきて、大学生から50才ぐらいまでにはソロを年2~3本、合計60本ぐらい歌っています。

(ソロ1回で寿命が1年縮むので、60回と年齢63歳で、すでに123歳になっている計算です。)そしてソロ、合唱、両方合わせて合計200本は超えています。

カラヤン75回、フルトヴェングラー103回に勝ってしまいました。

もちろん、楽器の先生方はこの比ではないと思いますが。

そして、今振り返ると、こんなに第九を歌ってきたのはなぜかと考えると、仲間との一体感や、こんなに難しい作品でも自分が演奏できている満足感と優越感、思いっ切り声を出し、叫んで、クラクラしながら歌いきる達成感を得られるなどです。

大学卒業後は楽しむものから、生活のためのものに変化していきます。

とても歓喜の歌ではなくなりましたが、ありがたいことに合唱団のボイトレやトラなど、収入の糧にもなっていました。

オペラだと収入より必要経費の支出の方が多くなるのがほとんどです(日本の場合)。また、ほぼ毎回ブラボーが掛かるオーケストラ曲は、非常にまれです。

日本の第九演奏回数はプロ、アマ通して異常に多いようです。そして年末に集中するのはさまざまな理由があると思いますが、自分の演奏歴から見ても、他の作品やオペラは同じ作品を最高でも10何回かぐらいで、第九だけ200回も超えるのは、資料集めも分析もせずに自分の独断だけですが、なぜ日本でこんなに多く演奏されるか推測しますと、まず、ドイツ語を医者を使う難しい外国語と錯覚。また、ソプラノ以外はとても旋

律的とは言えない難解な覚えにくいものを、高尚な音楽と錯覚するなど、日本人特有の気質。更にベートーヴェンの生い立ち、晩年は目も見えない耳も聞こえない、家族にも恵まれていないなど数々の苦悩。なのに「努力と勤勉の人、ベートーヴェン」そしてあの肖像画、いかにも高潔感溢れんばかり。日本人の好きなお涙ちょうだいの、演歌の世界に近いのか？もちろん、ドイツ語は発音も難しい、音を取るのも難しい、歌うのは苦しい、「歌って疲れた、喉が痛い、ああ～！ビールがうまい」と、満足感を得る。更に、日本人の見栄を刺激したのか、オケや指揮者、ソリストはプロが多く、合唱は趣味の団体が多いので、プロと共演出来る喜びがあるのか？と、自分がたどった経験も含め、おおむねこんな事で回数が多いのではないかと思います。

そして、もう一つ第九との関わりが、今から30年ほど前のイタリアに留学中の事。全くドイツ音楽とは離れていて忘れかけていた頃ですが、1992年のイタリア、ジェノヴァ国際博覧会で日本のイベントがあり、客船羊蹄丸が展示され、その船内のホールで、日本から来たお年寄りばかりの合唱団とイタリア人の素人さんの合唱との混合で、イタリアのオーケストラと第九を演奏するとの、恐ろしい企画があり、イタリアに留学中の声楽の学生にトラで参加してほしいと募集がありました。

参加してみると、ソリストに松本美和子さんがいて、それ以外はイタリア人のソリストと指揮者で、松本さん以外は第九が初体験。(当然と言えば当然でイタリア人は第九を聞いたことすらない人が、ほとんどでしょう？たぶん)

それはそれは不思議な演奏でしたが、事件が起きたのが本番前日の合わせで、イタリア人ソロのバリトンくんが「こんなの歌ってられない、おりる～！」と言いだし途中で帰ってしまいました。

さて大変、松本さんが「合唱のトラの学生さんで誰かソロ歌えない？」と言うのを、留学生の仲間が「秋山が歌える」と言ってしまったので、指揮者とソリストで打ち合わせをして、明日の本番でよろしくね～となってしまいました。

折角のジェノバの夜なのに、留学生のみんながホテルで宴会しているのを自分は一人、明日のために早寝をして体調を整えていました。

さて次の日、直前のリハも無事に終わり、開演15分前にひょっこり、あのバリトンくんが現れ、やっぱり歌うと言います。

こっちは飲み会も諦め、一人ドキドキしながら一夜を過ごしたのに、まさに **Mamma mia! Vaffanculo!** です。後の事を考えれば、バリトン君、意にそぐわなくてもやっぱり歌うよね～と言う事件でした。

しかし、イタリア人の良いところ、と言うか賢いところは多くの歌手が自国語以外のオペラや歌を、まず勉強しない。下手すると一生イタリア語しか歌った事のない歌手が存在します。日本人のように何でも歌える歌手が良いみたいな風潮、例えば、ある日本の

大きなコンクールの声楽課題曲は日本、ドイツ、イタリア、フランス、ロシア、の中から何曲か選び、その中から当日指定。などと、まさに器用貧乏な人と言ってはいけません。マルチタレント向けのコンクールがあります。日本は器用な演奏家を育てたいのでしょうか？イタリア人の様に一つしか出来ないが、それに特化した歌手を育て、演奏を聴きたいものですね。

さて、第九の経験談はこれくらいにして、言葉と音楽の関係について、面白い記述があります。

都築正道『日本人』と『第九交響曲』—「日本の第九」誕生の記（後半）

日本へ来たばかりのドイツ人が、日本人が原語で第九を歌うのを聴いて感激して言った。「おお、日本語はどこかドイツ語に似てますね」これは心なき冗談かもしれない。

だが、現代のドイツ人でさえも、難解に感じているシラーの詩を、なぜ日本人が日本人相手に、ドイツ語で歌うのだろうか。「第九は原語でなければ……」という精神主義に対しては「最悪の精神主義は形式主義である」と言っておこう。

わざわざドイツ語にカナをふってまで、誰にも分からぬ無国籍「原語」で歌うことは、悪しき形式主義である。

（都築正道『日本人』と『第九交響曲』—「日本の第九」誕生の記—（後半）、『歓喜の歌日本語版—ベートーヴェン作曲「交響曲」第九番合唱終曲（日本語）』なかにし礼（詞）、ショパン、1987年より引用。https://www.chopin.co.jp/media/score/ninth_symphony/a629 最終閲覧日2021年2月10日）

第九は世界中のあらゆる言語に翻訳されており、その歌詞で歌われることもあります。この事実を考慮し、「なかにし礼」さんに第九の歌詞を依頼したとのこと。そして、彼が書いたのが、以下の文章です。

日本語の第九元年

日本語で歌うと音楽の純度がさがるという。ということは原語で歌えば純度がさがらないということらしいが、なあにさがらないと思っているのは本人だけで、日本人がドイツ語を発音した瞬間にドイツ語はこわれているのである。

どうせこわれるなら、無茶苦茶にこわして、自分の血とし肉とし、そのあとで新しい何かを創り出せばよさそうなものなのに、それをしない。いつから日本人はそんな風になった。むかしはそうでなかった。浅草オペラ時代のあの出鱈目さ加減と、あのエネルギーを思いおこせばわかることなのだが、あれは大衆芸能の話で、純音

楽には関係ないと済まし顔でいう。しかし誰がなんと言おうと、あの浅草オペラ時代が、日本が最高に西洋音楽を吸収した時期であったことに間違いはない。そのエネルギーの源はなんであったかと言うと、当然のことながら言葉なのだ。日本語という言葉なのだ。

音楽の純度という目くらましに、目がくらんで、言葉をないがしろにしはじめて、日本のクラシックは活力を失った。

オペラ、オペレッタ、歌曲。会場は限られたファンや、専門家の溜り場であって、一般大衆は入りたいとも思わない場所になった。

言葉というものは、生（なま）なものである。ギラギラと油ぎったものである。日本語にすると、その生々しさがよみがえり、音楽が、油ぎって来るからいやだというのが本音だろう。音楽がわかってしまうのがいやなのだ。わかるのが恐いのだ。いつまでもわからないものとして、遠くにおいておきたいのだ。

しかし、音楽は人間が理解しあうために、創り出したものだ。わかりにくい筈がない。むつかしいわけがない。ベートーヴェンが身近になる。いいではないか。ベートーヴェンが安っぽくなる。いいではないか。音楽の純度のために失うものが多すぎてはいけない。言葉とともに歩んできた日本人の魂、日本の文化、言葉にしか、たくせない人間の祈り、言葉によって燃え上がる命。それよりも何よりも、ぼくら自身が日本人であるという事。

あなたはなぜ、英語で芝居を書くのですか、と質問されてシェイクスピアが答えた。「私は英国人のために芝居を書いているからです。」これは永遠の、真実なのだ。どうかみなさん、つたない日本語詩では、なりますけれど、誇りを持って歌ってください。1987年を日本語の第九元年と呼ぼうではありませんか。

(なかにし礼「日本語の第九元年」、前掲書より引用。 https://www.chopin.co.jp/products/vocal_music/daiku-japan.html 最終閲覧日2021年2月10日)

さて、この中には共感出来る部分と、そこはちょっと言わせてと、思うところがあります。日本語で外国の作品を歌うことが、歌手のレベルが上がらないと良く言われています。それは、日本語を日本語のポジションで歌うからです。

訳詞で歌う事に問題は多いです。折角日本語で歌っても何を言ってるか分からない。

じゃあ、字幕を入れれば？今度はそっちばかりに気がいって、肝心の音楽に集中出来ない。自分を振り返ると、学生時代、大学では原語ばかりで、確実に言葉を理解してオペラを歌い演技していたとは、とても言えない。

卒業後は、二期会研究生で日本語訳によるオペラを勉強しました。

そう言えば（この頃は、二期会の本公演も、日本語でヴェルディやプッチーニの作品を上演していました。）ほんの4～5年後の世代になると、たぶん原語だけになったと思います。特にモーツァルトのレチタティーボと歌は、日本語で勉強したおかげで良く理

解出来て、演技も言葉通りに表現出来るようになったと思います。後に、イタリア語で公演した際に非常に役に立ちました。

この経験から、現在担当している大学2年次のオペラ実習の授業を、周りの反対をなだめて、モーツァルトの作品を日本語の歌詞で行い、早2年目になります。

いまだに、反対の声を聞きますが、実は自分も留学以前は日本語で歌うことには抵抗がありました。

イタリア留学中はもちろん、帰国後もしばらくは、今思えばイタリアかぶれが鼻につく、嫌なやつで、日本語で歌うなんてナンセンスと、同じように反対していました。

が、その後経験も積み、また多数の外国を見聞し、イタリア語以外の作品にも出演して、心も柔軟になったのでは？と思います。

今は、自国語で歌うことは、必要と感ずるので、反対を押し切り今の時代に逆行するようではありますが、この先、学生たちは外国ものを日本語で歌う機会などは、ほぼ無いと感ずるので、あえて大学2年生の時期に訳詞で歌ってもらっています。

なぜなら、どんなに語学力を磨いても、正直云うと、オペラの歌詞をすべて日本語と同じように理解して演技している訳ではなく、音楽に力があるので理解しているように見えるだけで、音楽に助けられている部分が多く、得にモーツァルトのオペラのレチタティーボはイタリア人歌手においてすら言葉が古く、音符の中に言葉が多すぎですべてを理解して歌っていないそうだからです。

しかし、外国の作品を日本語訳で歌う事を全面推奨しているのではなく、内容をオンタイムで表現出来る事が重要なのです。

(でも、原語の意味と全く違うものになっている歌詞には要注意です。)

教育者としての目線からは、声のためには当然原語で歌うことがすべてのテクニックの向上に繋がり最優先ですが、一度は日本語で歌っておく経験が、音楽と言葉の繋がりへの理解を深め、更に実感を持たせることで、将来役に立つことを期待して教えています。

先日の映画「フォローイング、ザ、ナインス」は組織対人間の対決や、勝利の際に第九で奮い立つ「人類みな兄弟」をかかげていますが、今、現在2020年、人間対ウイルス、今こそ第九で元気を出さないとですね。

ただ、歌ってはいけませんね。ウイルスが飛沫しますから、聞くだけにしましょう！

(本学准教授 声楽)